

1. 平清盛 2. 平将門 3. 藤原純友 4. 源頼朝

1. 最澄は高野山に延暦寺を建て、真言宗を広めた。 2. 空海は比叡山に金剛峯寺を建て、天台宗を広めた。 3. 最澄は比叡山に金剛峯寺を建て、天台宗を広めた。 4. 空海は高野山に金剛峯寺を建て、真言宗を広めた。

1. 聖武天皇が、国ごとに国分寺や国分尼寺を建立した。

1. 地方の有力な武士団を直属の軍隊として組織し、圧倒的な武力によって朝廷内の反対勢力を排除する手法	2. 遣唐使の廃止によって外国の影響を排除し、藤原氏独自の法律を定めて朝廷の官僚機構を支配する手法	3. 自分の娘を天皇のきさきとし、その間に生まれた子が天皇になった際に、その外祖父として政治を行う手法	4. 聖徳太子の私財法を背景に広大な荘園を集積し、天皇から経済的に完全に独立した政府を樹立する手法
--	---	---	---

1. 貿易によって得られる莫大な利益を平氏一門の経済的基盤とし、また輸入された宋銭が国内で流通するきっかけとなった。
2. 遣隋使の派遣を継続することで、大陸の高度な律令制度や仏教文化を直接取り入れ、天皇中心の国づくりを強固にした。
3. 長崎の出島を窓口として、銀や銅を輸出する代わりにキリスト教の布教を伴わないヨーロッパの文化を導入した。
4. 倭寇による被害を防ぐために、明の皇帝から交付された勘合という札を用いて、正式な貿易船であることを証明させた。

1. 鴨長明が乱世の無常を記した『方丈記』
2. 山上憶良らが詠んだ歌を収めた『万葉集』
3. 菅原道真が遣唐使の廃止を提案した際の『建議文』
4. 清少納言が記した『枕草子』

1. 天皇の母方の祖父という立場を確保し、天皇との血縁関係を極めて強く保持し続けたから。
2. 律令に基づき、地方の国司を武士の中から選ぶことで、軍事的な統制力を高めたから。
3. 「武士の気風」を尊ぶことで、新興の武士階級と協力して地方の反乱を鎮圧したから。
4. 班田収授の法を厳格に運用し、全ての農民に土地を均等に配分することで税収を安定させたから。

1. 受領 2. 管領 3. 執權 4. 檢非違使

1. 武士の台頭を抑えるため、軍事力を強化して東北地方の経営を断念した。	2. 肥大化した奈良の寺院勢力から政治を切り離し、律令政治を再建しようとした。	3. 白村江の戦いでの敗北を受け、外敵からの防御を固めるために内陸部へ都を移した。	4. 大仏造立によって国を治めるため、東大寺を中心とした仏教政治を推進した。
--------------------------------------	---	---	--

1. 平安京から見て不吉な方角とされる北東（鬼門）に位置し、都を災いから守る役割を担った。
2. 天皇の住まいである御所のすぐ隣に配置され、政治の意思決定を直接補佐する役割を担った。
3. 遣唐使が東シナ海へ出発する際の航海安全を祈願するため、難波津に近い山に建設された。
4. 奈良の旧仏教勢力との連携を深めるため、平城京と平安京の中間地点に建設された。

1. 北条時宗が、大陸から襲来した元軍に備えるために、九州の博多湾沿岸に防塁を築かせた。
2. 大陸から伝わった仏教を政治に取り入れるため、聖武天皇が国ごとに国分寺や国分尼寺を建てた。
3. 藤原頼通が、極楽浄土を地上に再現しようと願い、宇治に平等院鳳凰堂を建立した。
4. 武田信玄などの戦国大名が、自分の領国を独自に支配するために「分国法」を定めた。

1. 藤原氏によって大宰府へ左遷された後、現地で没したが、後に学問の神様として信仰されるようになった。
2. 摂政の職につき、藤原氏の全盛期を築いたことで、娘を次々と天皇の后に送った。
3. 平氏の武士として力をつけ、兵庫の港を整備して宋との貿易を盛んに行った。
4. 遣隋使として大陸に渡り、十七条の憲法を制定して天皇中心の政治を目指した。

1. 自分の娘を天皇の后とし、その間に生まれた子を次の天皇に立てることで、天皇の祖父（外戚）として政治を主導したため。
2. 唐の制度にならって遣唐使を継続し、大陸の最新の法制度や文化を独断的に取り入れることで、国内の政治改革を主導したため。
3. 地方の有力な武士団を私兵として組織し、軍事的な圧力によって他の貴族を排除し、独自の行政組織を構築したため。
4. 全国の荘園をすべて自身の領地として管理し、朝廷の財政を完全に掌握することで、経済的な側面から天皇を支配したため。

答え合わせ・解説

問1	答え 2 平将門	平安時代中期、地方政治の混乱とともに武士団の形成が進む中で発生した「承平・天慶の乱」の一つです。関東で勢力を広げた平将門は、一時は独自の政権樹立を試みるほど朝廷を脅かしました。同時期に瀬戸内海で海賊を率いて反乱を起こした藤原純友とともに、武士の実力が中央の政治を揺るがし始めた象徴的な出来事です。
問2	答え 4 空海は高野山に金剛峯寺を建て、真言宗を広めた。	平安時代初期の新しい仏教（密教）において、空海は「高野山・金剛峯寺・真言宗」、最澄は「比叡山・延暦寺・天台宗」をそれぞれ拠点としました。山の名称と寺院名、宗派名の組み合わせを正しく理解することが重要です。
問3	答え 2 桓武天皇が、山背国（現在の京都府）の平安京へ都を移した。	奈良時代後半、平城京では仏教勢力が政治に深く関わり、天皇の権威を脅かすようになっていました。桓武天皇はこうした寺院勢力との結びつきを断ち切り、清新な政治を行うために、784年の長岡京遷都に続き、794年にはより地理的条件の整った平安京へと都を移しました。
問4	答え 3 自分の娘を天皇のきさきとし、その間に生まれた子が天皇になった際に、その外祖父として政治を行う手法	藤原氏は、一族の娘を天皇の後（きさき）として送り込み、その間に生まれた皇子を次の天皇に即位させることで、天皇の母方の祖父である「外祖父（がいそふ）」という地位を確立しました。この血縁関係を背景に、天皇が幼少の間は「摂政」、成人してからは「関白」という官職に就くことで、政治の決定権を独占しました。武力や独自の法律ではなく、天皇との個人的なつながりが権力の源泉であったことが特徴です。
問5	答え 1 貿易によって得られる莫大な利益を平氏一門の経済的基盤とし、また輸入された宋銭が国内で流通するきっかけとなった。	平清盛は、瀬戸内海の制海権を確保するとともに、大輪田泊（現在の神戸市）を大規模に修築して、宋との貿易を本格化させました。この貿易によってもたらされた「宋銭」は、のちに日本国内で貨幣として広く普及し、貨幣経済の発展に大きな影響を与えました。選択肢にある「勘合」は室町時代の日明貿易、「出島」は江戸時代の対外政策に関する記述です。
問6	答え 4 清少納言が記した『枕草子』	平安時代中期、土地制度が変化して荘園が増加する一方で、都の貴族たちは国風文化を享受していました。この時期、清少納言はかな文字を用いて、当時の宮廷社会の雰囲気や自然観を『枕草子』という随筆にまとめました。『万葉集』は奈良時代、『方丈記』は鎌倉時代の作品です。
問7	答え 1 天皇の母方の祖父という立場を確保し、天皇との血縁関係を極めて強く保持し続けたから。	摂関政治の最大の特徴は、藤原氏が天皇の「外祖父（母方の祖父）」になることにあります。当時の慣習では子供は母親の実家で育てられることが多かったため、母方の祖父は天皇に対して強い影響力を持つことができました。藤原道長はこの仕組みを最大限に利用し、娘たちを次々と天皇に嫁がせることで、揺るぎない権力基盤を構築しました。
問8	答え 1 受領	地方政治の権限が国司に委ねられる中で、実際に任地に赴いてその責任を果たす国司の最上位者を「受領（ずりょう）」と呼びました。受領は徴税を通じて莫大な富を蓄えることが可能になり、一方で強欲な受領が住民から訴えられる「尾张国郡司百姓等解」のような事件も発生しました。
問9	答え 2 肥大化した奈良の寺院勢力から政治を切り離し、律令政治を再建しようとした。	平城京では寺院が大きな力を持ち、政治への影響力が強まっていました。桓武天皇はこの状況を打破するために遷都を強行し、あわせて貴族の不正を監視する「勘解由使（かげゆし）」を設置するなど、天皇による統治を強化する改革を行いました。東北地方に対しては、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命して蝦夷の平定を進めており、経営を断念したわけではありません。
問10	答え 1 平安京から見て不吉な方角とされる北東（鬼門）に位置し、都を災いから守る役割を担った。	比叡山は平安京の北東に位置しており、当時の陰陽道の考え方で災いが入り込むとされる「鬼門」にあたります。そのため、延暦寺は国家を鎮め、都を災厄から守る「鎮護国家」の道場として、朝廷から厚い保護を受けました。
問11	答え 3 藤原頼通が、極楽浄土を地上に再現しようと願い、宇治に平等院鳳凰堂を建立した。	藤原道長・頼通父子の時代に摂関政治は最も栄えました。この時期、死後に極楽浄土へ生まれ変わることを願う「浄土信仰」が貴族の間で流行し、その影響を受けて藤原頼通は宇治に平等院鳳凰堂を建立しました。これは、当時の藤原氏の強大な権力と、華やかな貴族文化（国風文化）を象徴する出来事です。
問12	答え 1 藤原氏によって大宰府へ左遷された後、現地で没したが、後に学問の神様として信仰されるようになった。	菅原道真は優れた学者・政治家として活躍しましたが、藤原時平の策略によって大宰府へと左遷され、その地で亡くなりました。その後、平安京で落雷や疫病（感染症）の流行が相次いだため、これらは道真の怨霊の仕業であると恐れられました。のちに怒りを鎮めるために神として祀られ、現在は「天神様」として学問の神様の象徴となっています。
問13	答え 1 自分の娘を天皇の後とし、その間に生まれた子を次の天皇に立てることで、天皇の祖父（外戚）として政治を主導したため。	道長が権力を掌握できた最大の要因は、巧みな婚姻政策にあります。娘を天皇の後にし、その子供が幼くして天皇に即位すると、道長は天皇の祖父として摂政などの役職に就き、政治を意のままに動かすことが可能になりました。この「外戚」という立場が、武力や経済力以上に当時の貴族社会では決定的な影響力を持ちました。